

熊本藩の琴

高橋博巳

0

小論は、一連の拙稿「漢詩に読む琴の調べ」の続編として執筆したものである。既述部分は末尾の注を参照されたい。^①

1

さて、熊本藩の琴への注目は、江戸時代の詩文のなかで琴に係わるものがことのほか肥後熊本には多いようだという印象に発している。

十八世紀以降の熊本藩の文教の隆盛はしだいに機が熟して、宝暦四年（一七五四）の藩校時習館の発足が、さらにそうした気運を深め広げる機縁となった。その発端は藩主細川重賢（一七二〇～一八五）の事蹟を記した『銀台遺事』に次のように記されている。

宝暦四年、熊本之城二ノ丸の内に、学校を建て給ひ、文を学ぶ所を時習館と名付、一族長岡内膳忠英を総教、秋山儀右衛門定政を教授として、訓導師・句読師などいへるもの十余輩あり。

（『肥後文献叢書』第一巻、歴史図書社、一九七一年）

同書は藩命によって、高本紫溟（一七三八～一八一三）が撰述した。事のはじまりは、片岡朱陵（一七二五～一七八）の門下のあいだから、宝暦の初めころ「国に学校ありなば、英才を養やうに便あらん」という声が上がったことに依る。

『肥後先哲遺蹟』（同上、第五卷）の片岡朱陵の項には、「宝暦の名

臣多くこの人の門に出たり」と記されているが（巻二）、朱陵自身は「文酒自適」の気儘な性格で、様々なエピソードが伝わっている。その破格ぶりの一端は、松崎慊堂（一七七一～一八四四）の次の記述によっても知られよう。

○故郷には錦はきずに難波江の梅の花笠かざしてぞ行く」朱陵子（片岡善二郎、号は朱陵）靈感公につかえ、玉山翁と時を同じうす。公に従って江戸に在るの時、まさに大阪に赴かんとして、公に就いて直ちに請う。公はこれを許す。すなわち東装して発せんとす。有司はその故を詰問す。朱陵子は曰く、「吾は直ちに公に請い、有司に因らざるなり」と。すなわち発す。阪に在り、遂に郷に帰るといふ。その時に詠ずるところ右の如し。

（文政八年一月十三日、『慊堂日曆』1、平凡社、一九七〇年）

「靈感公」は重賢である。「有司に因らず」通常の手続きを飛ばして藩主に直訴し、大阪を経ての帰郷にさいして、「錦は着ずに難波江の梅の花笠」をかざすところが粹と見るべきであろう。誰にでも真似のできることでないが、これも熊本藩の度量があつての話である。

亀井南冥（一七四三～一八一四）の「熊府春望の事」には、こうも伝えられている。

肥侯学問を深く好ませられ、別て詩を好たまふゆゑ、人情に通ぜ

られし政事多しと承れり。（中略）此十年以前にもありけん、侯
江戸へ発駕の前に仰出されしは、「今般江戸へ土産として持越度
存ずる間「熊府春望」と云題にして、家中大小の士詩を作り一卷
に仕立て、姓名をも書記し指出すべし」とありければ、上下共に
面白き命なりとて思々に詩を作り、程なく成就して一卷に認め指
上けり。五七言律絶古詩歌行等もあり。人数百人余ありし由承れ
り。さて驚入たる盛なる事なり。

〔肥後物語〕日本経済大典第二十二
これが熊本藩の文雅の実態だった。南溟は「大国とても十人か二十人
とは無きものなるにケ様の夥しき事は古今に秀たる珍事」と絶賛して
いる。たとえば仲井士誠の「熊府春望」は、そのうちの一首であろう。
士誠は国老長岡宮之の臣下。

千雉層城倚碧空 千雉層城碧空に倚り
洋林佳氣鬱葱葱 洋林佳氣鬱葱葱
長橋柳亂鶯聲滑 長橋柳は乱れ鶯聲滑かなり
萬樹花開日色紅 万樹花開いて日色紅なり
金嶺朝霞猶帶雪 金嶺の朝霞猶お雪を帯び
畫湖春水欲涵虹 画湖の春水虹を涵さんと欲す
西方新施文明化 西方新たに施す文明の化
不減絃歌鄒魯風 減せず絃歌鄒魯の風

〔梁洋集〕卷八、『肥後文献叢書』第二卷
「千雉層城」は熊本城。「洋林」は藩校の時習館。そこには「佳氣」
和やかな気が満ちている。「鬱葱葱」はすぐれて、よい気配が漂うさ
ま。「西方」は、ここ熊本の地。「鄒魯の風」は儒教の教化が及ぶこと。
ところで、「学校」については当時江戸で細川重賢に侍してい
た秋山玉山（一七〇二〜六三）に連絡することになり、その手紙を書

いたのが村井椿寿、号琴山（一七三三〜一八一五）だった。奇しくも
その頃、「公、或日玉山を召され、学校を建んと思ふが如何と仰せら
れ」ということがあって、玉山はまず国老の堀平太左衛門（一七一六
〜九三）に問い合わせるよう答えて一旦は帰宅した。平太左衛門は片
岡朱陵門下のひとりである。そこに熊本からの手紙が届くという偶然
の一致に驚いて取って返し、手紙を重賢に見せたところ、トントン拍
子に話が進んだという次第は、当事者の一人である琴山が語るのを、
辛島塩井（一七五四〜一八三九）が聞いた「物語」だった（『聞儘記』、
『肥後先哲遺蹟』卷二）。こうして社会の成熟と文雅の醸成に相乗効果
が生じたわけである。

2

藩校の初代祭酒は、秋山玉山が勤めた。玉山は医学と儒学を兼修し、
昌平黌では林鳳岡（一六四四〜一七三三）に師事して、詩人としても
徂徠学派をはじめ幅広い交友があった。江村北海の『日本詩史』巻五
に、

肥後、近時芸文の称有り。秋玉山、名声煥発、詩才嘉すべし。
（大谷雅夫校注『日本詩史 五山堂詩話』新日本古典文学大系65、
岩波書店）

いま『玉山先生詩集』および『玉山先生遺稿』につけば、次のよう
な作が目につく。

紀世馨賦竹、托田生見寄、因和答謝、聞令姪阿爵有神童名、故
兼及之（紀世馨、竹を賦し、田生に托して寄せらる。因りて和
して答謝す。令姪阿爵、神童の名有りと聞く。故に兼ねて之に

及ぶ)

聞君思我拂瑶琴 聞く君我を思つて瑶琴を払うと
 何日相逢入竹林 何の日か相い逢いて竹林に入らん
 瀟洒原知堪把臂 瀟洒原と知る臂を把るに堪えたり
 清虚況復欲論心 清虚況んや復た心を論ぜんと欲するをや
 新詩自似琅玕色 新詩自ら琅玕の色に似たり
 長嘯還同鸞鳳音 長嘯還た鸞鳳の音に同じ
 不啻風流青眼好 啻に風流青眼の好きのみならず
 兼伝小阮可繁陰 兼ねて小阮の繁陰す可きを伝う

〔紀世馨〕は細井平洲(一七二八—一八〇一)で、世馨は字。平洲は後に米沢・尾張両藩に仕えて活躍するが、このときはまだ駆け出しの儒者にすぎなかった。詩はいきなり、「瑶琴」で始まっている。平洲が玉山のことを思つて琴を弾いたと聞いて、いつの日か「竹林」に入ろうというのは、竹林の七賢の故事に倣つたのであろうか。「瀟洒」は俗気がなく、爽やかなさま。「把臂」は肘をとる、親しみの表現。親子ほど年の離れた二人は意気投合したのであろう。「清虚」は我執がなく、心がさっぱりしていること。「琅玕」は竹の別名、また玉に似た美しい石。「鸞鳳」は神鳥の名、その声は音楽的で美しいとされ、優れた人物や、有徳の君子にたとえられる。「小阮」は阮籍の甥、阮咸のこと。転じて他人の甥をいう。意をもつて元詩の「既」字を「阮」に改めた。「繁陰」は茂った樹木の陰で、庇護のもとにあることの譬え。

このとき、平洲が玉山に贈つた詩は、「詠竹爲玉山先生五十初度壽」(竹を詠じて、玉山先生五十初度の寿と為す)という題で、次のように詠まれていた。玉山五十歳は、宝暦元年(一七五一)に当たり、とくに平洲は二十四歳だった。尾張から江戸に出て、師の中西淡淵(一

七〇九—五二)を頼つて独立したばかりの頃である。しかし、すでに十八歳より長崎に三年間滞在して、華音のみならず、広く書画詩文を学んでいた。琴もそのころに習得したのであろうか。

梁園修竹鬱參差 梁園の修竹鬱として參差しんし
 特見孤根碧玉姿 特に見る孤根碧玉の姿
 自帶清風餘雨露 自ら清風を帯びて雨露を余し
 還含曙日映臺池 還つて曙日を含んで台池に映す
 還含曙日映臺池 還つて曙日を含んで台池に映す
 紫花當是青鸞處 紫花當に是れ青鸞の処るところ
 翠実能無彩鳳枝 翠実能く彩鳳の枝無からんや
 爲説凌霜千載色 為に説く凌霜千載の色
 歲寒唯向此君知 歲寒唯だ此の君に向かつて知るのみ

〔梁園〕は漢代に梁の孝王が築いた庭園で、「七発」の作者枚乗や、「子虚賦」の作者司馬相如らが集つたところ。ここではそのイメージを借りて、華やかさを演出している。「修竹」は長い竹。「鬱」は茂るさま。「參差」は長短・高低が揃いなさま。「碧玉」は青い玉で、一本の根から生えた竹の色。「曙日」は朝日。「台池」は高台と池。「紫花」は紫色の花の桐。「青鸞」は鳳凰の一種で、青色の多いものを「鸞」という(洽聞記 大漢和所引)。「翠実」は青い竹の実。「凌霜」は霜をしのぐ。「千載の色」は長い年月、変わらない色。「歲寒」は冬の大寒。「此の君」は竹(言うまでもなく「子猷尋戴」、『蒙求』巻上に拠る)。嚴冬にも青々とした竹に玉山の姿を重ねて、五十歳の祝いとしたものである。

この詩のすこし後にも、「琴」が詠まれている。

同秋玉山岡士騏諸君集磯氏分韻(秋玉山・岡士騏諸君と同じく

磯氏に集す、分韻）

五斗醇醪率意除 五斗の醇醪率意に除る

盛筵非是事豪華 盛筵是れ豪華を事とするに非ず

人元益者憐三友 人は元もと益者三友を憐れみ

客自能文見一家 客は自ら能文一家を見す

坐久操琴秋葉振 坐久しくして琴を操つれば秋葉振るい

歌闌倚檻片雲斜 歌闌にして檻に倚れば片雲斜めなり

同襟此興難常得 同襟此の興常には得難し

何恪彩毫映晚霞 何ぞ恪しまん彩毫の晚霞に映るを

（同上）

「醇醪」は美酒。「率意」は意のままに。「除」は、ついで買うこと。「盛筵」は盛んな宴会であるが、なにも豪華である必要はない。「益者三友」は有益な友だちが三種、すなわち「直」（正直）と「諒」（誠心）と「多聞」（物知り）は、「論語」季氏篇の孔子の言葉。これは主人「磯氏」の考えであろう。対して「客」の玉山以下の面々は、「能文」文人として「一家」を成している。宴が始まってしばらくして平洲が「琴」を演奏すると、「秋葉」がはらはらと散ったり、皆が「歌」を詠む一方、空には「片雲」ちぎれ雲が移動して、時は静かに流れていた。「同襟」心を通わせた友人の集まりにしても、いつもこれほどの「興」が体験できるとは限らない。「彩毫」は各人が詩作に用いている美しい筆。それが「晚霞」夕焼けに輝いて見えるのも、「豪華」の一つだった。これが玉山が江戸滞在中に「琴」の調べに触れた場面である。一方、「夜坐二首」を読むと、玉山自身も琴人だったことが判明する。

不寝抄茶経 寝ずして茶経を抄し

深坐在竹屋 深く坐して竹屋に在り

笑此旧青氈 笑う此の旧青氈

烟月照幽独 烟月幽独を照らす

月影窺竹林 月影竹林を窺い

是我彈琴處 是我が彈琴の処

方其曲終時 方に其の曲の終らんとする時

徘徊似難去 徘徊去り難きに似たり

徘徊似難去 徘徊去り難きに似たり

（遺稿）卷四）

「竹屋」は竹葺きの屋根の家。「旧青氈」古い青色の毛氈は、晋の王猷之が盗賊に入られたとき、古くから伝わる家宝なので置いて行けと言った故事に拠る（晋書）王猷之伝。「烟月」は、おぼろ月。「幽独」は一人住まい。起・承句の月光に照らされた「竹林」が「我が彈琴の処」とは、王維の「竹里館」を彷彿とさせる措辞である。よく知られた詩ながら、比較すれば一目瞭然である。

獨坐幽篁裏 独り坐す幽篁の裏

彈琴復長嘯 琴を弾じ復た長嘯す

深林人不知 深林人知らず

明月來相照 明月来たりて相照らす

（王維詩集）岩波文庫）

ことに玉山が「曲の終わり」に「徘徊」して「去りがたい」というのは、琴に親しんだ人でなければ言えない台詞ではなからうか。それにしても玉山はどこで誰から、琴を学んだのであろうか。

「哭高子式山人八首」（高子式山人を哭す）のうちの第六には、

一從流水朱絃絶 一たび流水に従って朱絃絶え

無復陽春白雪聲 復た陽春・白雪の声無し

と、「流水」「陽春」「白雪」と琴曲の名が並んでいる。友人の「高子式」高野蘭亭（一七〇四〜五七）も琴人だった（拙稿「古文辞派の琴」の準備がある）。

その蘭亭の「懐海西秋文学」（海西の秋文学を懐かしむ）は、

中原分手索居深 中原手を分かつて索居深し
極目風煙萬里心 極目風煙萬里の心

と詠い起こされている。「中原」は江戸。「索居」は孤独に暮らすこと。「極目」は見渡すかぎり。「風煙」は風と霞。「萬里の心」は遠く江戸と熊本に離れ離れになった心情。結びは、

君自觀濤傳絶調 君自ら觀濤絶調を伝え
相逢重聽廣陵琴 相い逢いて重ねて聴かん広陵の琴

（『蘭亭先生詩集』巻八、宝暦八年刊）
というもので、「觀濤」は波濤を見ること。「絶調」は好調で、このうえなく調うこと。「広陵散」は嵇康が隠者から伝えられた琴曲の名。これを弹奏したのは蘭亭であろう。

3

玉山がこうした琴人の一人ならば、これに続く人がいても不思議ではない。先の国老堀平太左衛門にしてから、その歌集に「松風入琴」と題して、

ひく琴のしらへも千世のこゑなれや軒はの松の風のかよひて

（『呉松園歌集』、『肥後文献叢書』第二巻）

と詠んでいるし、片岡朱陵にも「江上琴興」と題する作がある。

佳人抱瑤琴 佳人瑤琴を抱き
樓上清夜臨 樓上清夜に臨む
雲山寂斂色 雲山寂として色を斂め
江水澹無音 江水淡として音無し
素手拂朱絃 素手朱絃を払う
悠悠萬古心 悠悠萬古の心
曲罷唯自嘆 曲罷り唯だ自ら嘆す
涕淚潛滿襟 涕淚潜として襟に満つ
借問調琴者 借問す琴を調ぶる者
秋思何絲深 秋思何の糸か深き

（『樂洋集』巻四）

朱陵みずから弾いてはいないようだが、「佳人」の演奏を聴いて「万古の心」を感じ、そのうえ「涕淚潜として襟に満つ」というのは、琴人に連なる立ち位置であろう。「素手」は白くしなやかな手。結局で「秋思」がどの糸によってより深く響くかと琴人に問うているのも、季節のせいとばかりは言えない。そして朱陵もまた、江戸で高野蘭亭の琴を聴いた一人だった。

九月晦日同米大夫及諸子過飲高子式明月樓得侵韻（九月晦日、米大夫及び諸子と同じく高子式が明月樓に過飲す。侵韻を得たり）

歩隨流水入幽林 歩は流水に随つて幽林に入る
卜築依然歲月深 卜築依然として歲月深し
芳菊猶餘三經色 芳菊猶お余す三徑の色
古桐無恙獨絃音 古桐恙無し独絃の音

涉園石上題霜葉

園を涉り石上霜葉に題す

隱几洲前聽水禽

几に隠つて洲前水禽を聴く

此處蕭條車馬絶

此の処蕭條として車馬絶え

唯教我輩得相尋

唯だ我輩をして相い尋ることを得せしめよ

（同上）

「米大夫」は米田松洞（一七二〇〜一七九七）で、国老長岡芳渚の弟。『銀台遺事』には、「芸能多きものなり」として、「弓馬・軍役」のみならず「学問」を好み、殊に詩文は服部南郭（一六八三〜一七五九）に師事して、『四時園詩集』があると記されている。六十歳を過ぎて致仕してからは、「西山のほとり、水石をかしき所に、幽棲をかまへ、避竹園と名づけ、風に吟じ月にうそぶきて春秋を送」った。

現役のころのエピソードとして、それほどの人材ならば堀平太左衛門と並べて「国務」に任じてはと提案された重賢の答えが、「いやとよ麒麟に田はすかせられぬは」だったという。「麒麟」は今日、動物園で見るとは異なり、聖人の理想の政治が行われる前に現れる聖獣のことである。これは米田松洞の詩文の才を誉めることによって、重賢の治政を理想に近づけたいという願望でもあったろう。蘭亭も「奉送肥後侯就藩」（肥後侯の藩に就くを送り奉る）で、

君侯千乘出中原

君侯千乘中原を出で

此日彤弓見主恩

此の日彤弓主恩を見る

列国元封周牧伯

列国元と封ず周の牧伯

當朝不讓漢王孫

當朝譲らず漢の王孫に

（下略、『蘭亭先生詩集』巻六）

と、はなむけている。「千乘」は、兵車千両を動員できる大國の諸侯。「彤弓」は天子が大功のあった諸侯に与えた赤く塗った弓。「牧伯」は州の長官。「王孫」は帝王の子孫。周・漢に事寄せながら、「當朝」徳

川の世に大藩の「君侯」であることを寿いだのである。

閑話休題、朱陵の詩に戻れば、「古桐恙無し独絃の音」は、彈琴の場面を伝えている。「車馬が絶える」とは貴人の訪問がないこと。そのかわりに「我輩」だけは訪問させていただきというのは、詩人の幽居の雰囲気がよほど朱陵を魅了したのである。ただし朱陵自身が琴人だったかどうかは定かでない。

その点で、米田松洞の「梅溪即事」に次のような一節があるのは、松洞が琴人だったことを示しているよう。

一携琴酒向梅溪
春霧蒼々樹色迷

一たび琴酒を携えて梅溪に向かえば
春霧蒼々樹色迷う

借問開花何處在
夜來風雨落爲泥

借問す開花は何処に在りや
夜來風雨落ちて泥と爲る

また「歲暮草堂小集、贈板微卿、得五微」（歲暮草堂の小集、板微卿に贈る、五微を得たり）には、こう詠まれている。「板微卿」は、熊本藩儒の板井青霞（一七三六〜一八〇六）で、「微卿」は字。

涇寒山逕往還稀

涇寒の山徑往還稀なり

多謝黃昏獨叩扉

多謝す黃昏独り扉を叩くを

霜雪如迎添月色

霜雪迎えるが如く月色を添え

梅花有待發春輝

梅花待つ有りて春輝を發す

終年翰墨仍無恙

終年翰墨仍お恙無し

衰老琴樽也不違

衰老琴樽也た違わず

相繼更開新歲飲

相い繼ぎて更に開く新歲の飲

與君同見早鶯飛

君と同一に見ん早鶯の飛ぶを

（同上、卷三）

「五寒」は、寒さに閉じこめられること。そうなると人の往来も「稀」になる。そのようなときの訪問者には「多謝」感謝の気持ちも深い。「終年」は一年中。「翰墨」筆と墨による文学活動も盛んである。「衰老」古い衰えても、「琴・樽」琴と酒は依然として傍にあった。しかも「歳暮」から「新歳」に「相い継ぎて」会飲できる仕合わせの供は、「琴」だったわけである。

米田松洞にはもう一人、藩儒の上野霞山（一七一三〜九一）という友人がいた。詩は「野伯修示南郭先生畫山水、且乞詩、因作此題之」（野伯修、南郭先生の画山水を示し、且つ詩を乞う。因りて此を作り、之に題す）と題されて、そこにはこう詠まれている。「伯修」は霞山の字。

有客携來山水圖
展開咫尺渺江湖
洞前波勢侵巖石
烟霧蒼茫山有無
云乞芙蕖館中主
我亦曾觀之赤羽
那知今復共君觀
偶坐低頭感今古
維昔斯人勝具多
朝度海嶠暮山阿
探奇歸去向牆壁
寫得雲霞與薜蘿
自道從來供獨樂
乃彈綠綺且長歌
隨歌山水清音起

客有り携さえ來たる山水図
展開すれば咫尺江湖に渺たり
洞前波勢巖石を侵し
烟霧蒼茫として山有る無し
云う芙蕖館中の主に乞うと
我も亦た曾て之を赤羽に觀たり
那ぞ知らん今復た君と共に觀んとは
偶坐低頭今古を感ず
維昔斯の人勝具多し
朝海嶠を度り暮に山阿
奇を探り歸去して牆壁に向かい
写し得たり雲霞と薜蘿と
自ら道う從來獨樂に供すと
乃ち綠綺を弾じ且つ長歌す
歌に随つて山水清音起る

四壁玲玲鳴不止 四壁玲玲として鳴りて止まず
其音竟共其琴亡 其の音竟に其の琴と共に亡ぶ
水墨之痕留至此 水墨の痕留りて此に至る
猶想昔時隱凡人 猶お想う昔時凡に隠る人
嗒焉坐此江湖裏 嗒焉として此の江湖の裏に坐す

（同上、巻一）
上野霞山が持参したのは、服部南郭が描いた山水画だった。「芙蕖館」は服部南郭の塾の名。「赤羽」は南郭がいた場所。「勝具」は「済勝の具」の略で、健脚。「海嶠」は海の断崖。「山阿」は山の入り込んだところ。朝に海に行つたかと思えば、暮れには山というふうには神出鬼没、帰ってきたら「牆壁」土塀に向かつて風景を描いて、「独樂」一人の楽しみを満喫していた。そのうえ「綠綺を弾じ」たとすれば、南郭も琴人だったことになる。「其の音、竟に其の琴と共に亡ぶ」とあるからには、間違いない。「凡に隠る人」も南郭であり、それを懐かしく「想い」出しているのは松洞である。こうしてみると、これらの人々はすべて琴人だったろう。

4

だがやはり、熊本の琴人の筆頭は、村井琴山である。琴山は村井見樸（一七〇二〜六〇）の長男で、父見樸は玉山と親交があり、宝暦六年、医学校再春館の創設とともに教授となった。見樸の没後、琴山は京で吉益東洞（一七〇二〜七三）に師事して古医方を学ぶかたわら、兼ねて玉山にも師事して古文辞を学んでいた。琴については、「琴伝記」（『琴山琴録』所収）に詳しい記述がある。

それによれば、琴山は少年時代より「樂事」を好み、「伶工某人」について「箏と琵琶」を学んでいたが、「中年」になってはじめて「七絃琴を弾ずることを愛」するようになったという。安永元年（一七七

三)、弟の芳年が京で「琴工村淵充房」に石川丈山所蔵の、いわゆる眉公琴を模造させて贈ってくれたのを、独学で弾き方を学び「独奏して自ら楽」しんでいたところ、たまたま天明五年（一七八五）に長崎滞在中、「杭人潘渭川」と出会って、「右手七法、左手二法と、手勢」とを教わり、「南風・滄浪の二曲」と「操縵」を習うことができた。先の二曲はかねて独学ながら練習していたので習得も速く、渭川に「思わざりき、海外千里に知音を得んとは」と言わせたという。琴山は、「琴は聖人の大器にして、楽を為すの統なり」として、

嗚呼、其れ聖人の礼楽の教えを学ぶ者は、琴を舎きて又た孰いずかに適從せん。若し此れに由り聖人の楽を求めば、則ち其の源以て觀る可きのみ。君子の樂、聖人の道、一日も其の身を離れ、其の側を去る可からざる者なり。

と述べている。ここには琴山の琴に対する考えが尽くされている。

また同じ天明五年の春には、京の橋南谿（一七五三〜一八〇五）から「琴工の鳴鳳子」に「唐様の琴」を造らせたのを贈られ、さらに寛政六年にも「源子雲の遺琴」を贈られている。源子雲こと鈴木修敬（一七四一〜九〇）が、『皆川淇園門人帳』（宗政五十緒編『上方藝文叢刊』第五卷）の冒頭にその名が載るのは、宝暦九年、修敬が十九歳のときだった。琴山はこの琴を琴山小隱の琴室に常置して、部屋に「玄響」と扁していた。そして享和元年に長崎に再遊して、たまたま「錢氏の琴」を入手し、「南風・滄浪の二曲を歌い、或いは猗蘭を弾ず。此の外は奏せず」と記しているから、多曲を負らなかつたことが知られる。

また享和三年（一八〇三）には、安東省庵（一六二二〜一七〇一）所蔵の明の益王の琴および譜のことを聞き及んで、見たいと希望して許されたが事情があつてかなわず、「門生曾士功」に代わりに出向か

せて「譜」を写させるといふことがあつた。「曾士功」は曾木墨莊。安東省庵は明の遺臣朱舜水（一六〇〇〜八二）に師事し、かつ援助したことで知られている。琴山はまた、安東家秘蔵の「続尾琴」まで贈られている。

大城壺梁（二七四一〜一八一）の「木琴賦並序」には、琴山の音楽的な資質について興味深い記述がある。

煥昧於律。未能知其中與否。長岡君一日出而示之。村大年在坐。試櫟之。一坐皆驚嘆。余謂大年曰、「子、識櫟乎」。大年曰、「器今始目之。安能識櫟法。信手爲之耳」。長岡君粲然。命煥賦之。（煥、律に昧し。未だ能く其の中るか否かを知る能わず。長岡君一日、出して之を示す。村大年、坐に在り。試みに之を櫟れきる。一坐、皆な驚嘆す。余、大年に謂いて曰く、「子、櫟を識るか」と。大年曰く、「器、今始めて之をを目す。安くんぞ能く櫟法を識らんや。手に信せて之を爲すのみ」と。長岡君、粲然たり。煥に命じて、之を賦せしむ）（『壺梁先生遺稿』卷五）

「長岡君」は国老の長岡宮之であろうか。「櫟」は、こすつて音を立てること。このとき琴山は、初見の楽器（木琴）を手もなく演奏して皆を驚かせた。「樂事」を好むとは、こういうことを言うのである。「粲然」は、白い歯を見せて会心の笑みを浮かべること。

さらに琴山の「別業船並序」（別業船、並びに序）の「序」には、こう記されている。

余は舟遊を好んで、山色の棹に從いて屢しば移るを愛す。然れども貧ひん窶、一小船を造る能わず。興致の至る毎に、諸江の渡しに就いて、船を買い、酒及び琴書の雅物を載せ、水行數里を以てし、

興尽きて返る。号して別業船と曰い、以て坐遊の一と為す。

「別業船」は、船を別荘に見立てたもの。「舟遊」は琴山の趣味で、「坐遊の一」と見なしていた。「貧簞」云々は、むしろ謙辞である。借りた船に積み込むのは、「酒及び琴書の雅物」であるが、詩を見ると、

鶴與琴書一船中 鶴と琴書と一船の中

有酒有茶興不窮 酒有り茶有り興窮まらず

伴閑琴書伴眠鶴 閑に伴う琴書眠りに伴う鶴

自称江湖主人翁 自ら称す江湖主人の翁と

江湖何景非我有 江湖何の景か我が有に非ざる

何景又不爲我友 何の景か又た我が友為らざる

林園縦有一景長 林園縦い一景の長有るとも

争如萬山風月久 争いか如かん万山風月の久しきに

〔楽洋集〕卷八

とあって、船には「鶴」と「琴書」が併載されていたことがわかる。「江湖主人」を自称し、「何の景か我が有に非ざる。何の景か又た我が友為らざる」といって、「林園」の「一景の長」を「万山の風月」と対置し、断然後者を取るところに琴山の姿勢が見て取れる。もとより風景を私有する考えはなく、公有を活用する生き方は時代を超えて新鮮である。

次節で取り上げる高本紫溟の詩に、「小舟新就、將以翌夕汎白河、戲簡琴山翁」（小舟新たに就り、將に翌夕を以て白河に汎なぼんとし、戯れに琴山翁に簡す）があつて、その後半にこうある。

縦令白水真人在 縦た令い白水真人の在るとも

其奈青州従事無 其れ青州従事の無いきを奈ん

定識君家藏數斗 定めて識る君が家數斗を藏するを
携來肯伴釣漁徒 携たえ來たり肯たえて釣漁の徒に伴わんや

〔紫溟先生遺稿〕卷三、肥後文献叢書第二卷
「白水真人」は金錢。「青州従事」は美酒。「白水」と「青州」の対句も鮮やかながら、そうしたことよりもここでは舟遊好きにもかかわらず、あえて舟を私有しなかつた琴山への挨拶として意味がある。それが「小舟」を「新就」したことを「戯れに簡し」た所以である。

5

高本紫溟は數孤山（一七三五—一八〇二）の後継として、天明八年、時習館の三代教授となった。その詩「有所思」（思う所有り）には、「高山流水、鍾子期或いは之を知る。無絃無音、而して之を聴く者は誰そや」という副題が付いている。

我有萬古意 我に万古の意有り

托之無絃琴 之を無絃の琴に托す

美人在千里 美人千里に在り

誰能聽此音 誰か能く此の音を聴かん

馳情入遠雲 情を馳せ遠雲に入り

延目逐飛禽 目を延ばして飛禽を逐う

冥冥日云暮 冥冥日云こに暮る

寂寂淚盈襟 寂寂淚襟こに盈つ

〔紫溟先生詩集〕、同上

「万古の意」は、時空を超えた永遠の思い。これを「無絃の琴に托す」となると、副題にいうように「無絃無音」となって、誰が聴いてくれるかわかるはずもない。「美人」は蘇軾が「渺渺たり、予が懐い。美人を天の一方に望む」（前赤壁賦）、「蘇東坡詩選」岩波文庫）といっ

たように、才徳の優れた人。しかし「千里」彼方においては、いかんともしがたい。作者とともに途方にくれたところで、次のような詩に目が止まった。

賦得起坐弄鳴琴（起坐して鳴琴を弄するを賦し得たり）

幽人難着睡 幽人睡りに着き難し

中夜撫鳴琴 中夜鳴琴を撫す

四壁虫声静 四壁 虫声静かなり

疎簾月影沈 疎簾 月影沈む

長風傳逸響 長風 逸響を伝え

何處寄知音 何処にか知音を寄せん

彈罷空長嘆 弾じ罷めて空しく長嘆す

蕭条萬古心 蕭条たり 万古の心

（同上）

「幽人」は隠君子で、紫溟自身を指す。「中夜」は夜半。夜が更けても眠れないのは、容易に解けない悩みゆえである。「虫声」さえ止んで、「疎簾」粗いすだれを通して月光が射し込むばかり。「長風」遠くまで吹く風に乗せて、「逸響」優れた音楽を伝えても、「知音」はどこにいるかわからない。そこで「弾じ罷めて」むなしくため息をついていると、「万古の心」は向かう先もなく、寂しさはつものるばかり。ここでは琴の調べも、紫溟の心を支え切れなかつたのであろう。「空」一字がことさらに重く感じられる。

しかしこれほど深刻でなく、琴一般であれば次のような作がある。

郊行日暮、訪井大年、途中口號（郊行して日暮る。井大年を訪う。途中の口号）

城頭車馬正紛々 城頭車馬正に紛々たり

歩出東門野色分 歩して東門を出づれば野色分る

携酒相求*鳥侶 酒を携え相い求む*鳥の侶

過橋且弄白鷗群 橋を過ぎて且く弄す白鷗の群

梅花一路迷春月 梅花 一路 春月に迷い

楊柳千條入暮雲 楊柳 千条 暮雲に入る

更上扁舟訪安道 更に扁舟に上り 安道を訪う

琴聲應得夜深聞 琴声 応に夜深けに聞くを得べし

〔紫溟先生遺稿〕卷三

「井大年」は村井琴山の字。「*鳥」は原本の活字が欠けていて読めない。「白鷗の群」は世外の交わりを示す。一時のリクリエーションだったろう。末句の「安道」は、「子猷尋戴」の王徽之（字、子猷）が戴逵（字、安道）を「小舟」に乗って尋ねた故事によって、「琴声」に戴逵と琴山の「琴」を言い掛けている（「子猷尋戴」、「蒙求」卷上）。「扁舟」は前節の終わりで見た「小舟」であろう。琴山は他に替えがたい友人だった。

さらに「琴先生惠示樂哉篇、次韻奉酬」（琴先生、樂哉篇を惠示さる。次韻して酬い奉る）には、こう詠まれている。

樂哉無適不相同 楽しいかな 適くとして相い同じからざるは無し

無し

俱是七旬餘歲翁 俱に是れ七旬余歳の翁

何用傷悲嘆老大 何ぞ用いん 傷悲 老大を嘆くことを

唯應遊戲似兒童 唯だ応に遊戲 兒童に似たるべし

彈琴夜靜西山月 琴を弾けば 夜は静かなり 西山の月

垂釣涼多北渚風 釣を垂れば 涼は多し 北渚の風

聞説芙蓉開滿沼 聞説く 芙蓉開いて 沼に満つるを

名園豈獨桂花叢 名園 豈に独り 桂花の叢のみならんや

(同上)

題にいう「楽しいかな」は、人生肯定の言葉である。その理由は外でもない、「適くとして相い同じからざるは無し」だからである。何が楽しいとって、同心の友と会するほど楽しいことはない。しかも二人は「七旬余歳の翁」である。すでに古稀を越えて、もはや無敵の境地に達している。「傷悲」は、いたみかなしむことで、そうした悲惨とも無縁である。「老大」年を取ることを悲しむまえに、「遊戯は兒童に似て」楽しいことばかり、それが琴山にとっては「弾琴」であり、紫溟にとつては「垂釣」釣りだった。ふつう、老人は老いを嘆くものであるが、その点でもこの二人は別格だった(揖斐高『江戸漢詩の情景―風雅と日常』Ⅲ「生老病死」を参照、岩波新書、二〇二二年)。また琴山の別荘には「芙蓉」蓮が沼に満ち、「桂花」だけが見所ではなかった。ちなみに琴山の別荘は叢桂園という。

しかし、なんといってもクライマックスは、浦上玉堂との出会いである。すでに拙著で触れたところながら、重複を許された²⁾。

南醫伯集、聽玉堂翁彈催馬樂、筵田(南醫伯集、玉堂翁が催馬樂を弾くを聴く。筵田)

至樂堂中酔不歸 至樂堂中酔いて帰らず

那知風雪夜霏々 那ぞ知らん風雪夜に霏々たるを

此筵暫駐青田鶴 此の筵暫らく駐む青田鶴

祇恐瑤琴曲罷飛 祇だ恐る瑤琴の曲罷りて飛ぶを

(同上、巻四)

「南醫伯」は御次医師、南良庵(一七三五―七四)で、宝暦二年に父李庵の没後、家を嗣ぎ、同八年、侍医となって重用された。実際的な人だったらしく、時には「作事奉行」のような仕事まで任されたという。先の拙著ではこの人を琴山の弟と勘違いしたが、琴山の弟は婿養

子だったので、謹んで訂正したい。「続肥後先哲遺蹟」巻三には、

玉山、朱陵、良庵三人、松竹梅の一字を分て堂号となす。玉山竹を用ひ、朱陵梅を用ひ、良庵松を用ふと。

とあり、良庵は「松石居」と号していた。そこへ玉堂が訪れて、「風雪の夜」に「瑤琴」を奏でたのを聴いたなかに紫溟だけでなく、辛島塩井もいたのである。詩は次のとおり。

南家夜集、席上贈琴士玉堂翁(南家の夜集、席上、琴士玉堂翁に贈る)

叟は何爲者 叟は何爲る者ぞ

美髯銀雪侵 美髯銀雪侵す

身乘仙嶠鶴 身は乗る仙嶠の鶴

手弄玉堂琴 手は弄ぶ玉堂琴

行酒新知樂 行酒新知の樂

撫絃大古音 絃を撫でれば大古の音

夜深人未散 夜深けて人未だ散ぜず

松籟滌虚襟 松籟虚襟を滌あう

(『塩井先生遺稿』巻二、『肥後文献叢書』第五巻)

一読、印象的な始まりである。「叟は何爲る者ぞ」には、「銀雪」のような「美髯」を蓄えた老人に対する好奇心が溢れている。しかし演奏を聴くうちに、好奇心はいっしょか感動に変わっていた。「仙嶠の鶴」は、李白の「賀監の四明に帰るを送る、応制」に、「仙嶠、空に浮かび島嶼微なり」と見え、「借問す、珠樹に栖まんと欲する鶴」とあるのを踏まえるだろう(『分類補註李太白詩』十七)。それほど玉堂の風姿には、現実感が乏しかったのである。「行酒」は順番に酒をつ

ぐこと。この猷酬には、「新知の楽」が伴っていた。「太古」はふつう太古と書く。「虚襟」は、虚心。「夜が深けても」、客が一向に帰ろうとしなかったのは、深く心を動かされたからである。「松籟」は琴の音の比喩で、余韻はいつまでも揺曳していた。

この翌日、玉堂は紫溟の客となつて、川観亭を訪れている。

玉堂翁見過川観亭、奏琴歌催馬樂、喜而賦（玉堂翁、川観亭に過ぎらる。琴を奏し催馬樂を歌う。喜びて賦す）

相逢昨日共含卮

相い逢いて昨日共に卮を含む

未拂朱絃心已知

未だ朱絃を払わざるに心已に知る

雨雪蕭條高枕處

雨雪蕭條枕を高くする処

江邨寂寞掩門時

江邨寂寞門を掩う時

興來鶴髦過茅宇

興来たつて鶴髦茅宇を過ぎり

歌起鶯梭織柳糸

歌起こり鶯梭柳糸を織る

縱是故鄉人有待

縦い是れ故郷に人の待つ有るも

休催君馬赴歸期

催すを休めよ君が馬の帰期に赴くを

（『紫溟先生遺稿』卷三）

「昨日」会つたばかりの玉堂を、演奏前に早くも「心」を理解した紫溟が招いたのである。

また「失題二首」のうちの第二に、

白髮高人拂玉琴

白髮の高人玉琴を払い

虚堂月色夜沈沈

虚堂月色夜沈沈

彈作秋波澎湃響

弾じ作す秋波澎湃として響き

頓令人坐洞庭陰

頓かに人をして洞庭の陰に坐せしむ

（同上、卷四）

とあるのは、「題は失われて」いるものの「白髮の高人」といい、「玉

琴」といい、玉堂の琴としか考えられない。その「澎湃とした響き」が聴く人を「洞庭の陰」にまで運ぶ力を持っていたのも、さぞかしと頷ける。

6

ところで、紫溟の詩にはもう一人旅の琴人が登場する。文化元年（一八〇四）の初夏に熊本を訪れた菊舎尼（二七五三〜一八二六）は、まず高本紫溟を訪れたらしい。

初夏到東肥訪高本李先生（初夏東肥に到り、高本李先生を訪う）

破笠敝簑遠覓師

破笠 敝簑 遠く師を覓む

山河跋涉喜相期

山河跋涉相い期すを喜ぶ

携來流水琴中趣

携え來たる流水琴中の趣

長使交情無盡時

長く交情をして尽くる時無からしめん

玉の光得てしらべたし若竹に

（『手折菊』三、上野さち子編著『田上菊舎全集』上、

和泉書院、二〇〇〇年、以下引用はすべて同書に拠る）

「破笠・敝簑」は旅で破れた笠と簑。二句目の「相い期す」とは、両者の思いが通じたことを指す。「山河跋涉」の苦勞は、こうして報われたのである。「流水」は琴曲の名。

次の詩には、紫溟の別邸「川観亭」が詠まれている。

始到川観亭作二首（始めて川観亭に到りての作二首）

此夕知何夕

此の夕知んぬ何の夕ぞ

清川思不違

清川思い違わず

初來眞有得

初めて来たり真に得る有ること

新月相迎歸 新月相い迎えて帰る
 西嶽浮雲客 西嶽 浮雲の客
 北山明月風 北山 明月の風
 孤琴一壺酒 孤琴 一壺の酒
 携到独棲中 携さえ到る 独棲の中
 すみ替る宿へ伴ふ月涼し

二首のうちの第一。「すみ替る」とは、この別邸に菊舎尼が「孤琴一壺の酒」を携えて引き移ったことをいう。
 また次のような詩もある。

琴山社茗讌菊舎田上氏爲主（琴山社の茗讌、菊舎田上氏が主として）
 幽憩林亭静 幽憩 林亭静かなり
 相邀入社深 相い邀えて社に入ること深し
 松風生石鼎 松風 石鼎に生じ
 藓壁掛瑶琴 藓壁 瑶琴を掛く
 茗飲杯中理 茗飲 杯中の理
 雲遊物外心 雲遊 物外の心
 清談不覺暝 清談 暝を覚まさず
 山月照虚襟 山月 虚襟を照らす

（『紫溟先生遺稿』巻二）

「幽憩」は世を避けて静かに憩うこと。この「琴山社茗讌」は、次に引く菊舎尼の詩と同時のものだろうか。

遊琴山先生茶室有詩見示次韻（琴山先生の茶室に遊び 詩有り示さる。韻を次ぐ）

歸雲斂處上高堂 歸雲斂まる処 高堂に上る
 幾客開簾坐洞房 幾客か簾を開いて 洞房に坐す
 松下引風傳古曲 松下 風を引いて 古曲を伝う
 荷邊迎月納新涼 荷邊 月を迎えて 新涼を納る
 雪凝碗底濃茶色 雪は碗底に凝る 濃茶の色
 霞滿杯中碧酒馨 霞は杯中に滿つ 碧酒の香
 豈料今宵塵外興 豈に料らんや 今宵 塵外の興
 井泉共汲潤枯腸 井泉 共に汲んで 枯腸を潤すを

また「次子昺井君見贈高韻」（子昺井君の贈らるる高韻を次ぐ）には、こう詠まれている。

孤客彈琴客 孤客 彈琴の客
 白雲翳數峯 白雲 數峯を翳う
 黄昏人去後 黄昏 人去りて後
 月下撫哀松 月下 哀松を撫づ
 主ぶつて月と物いふ暮涼し

（同上）

「子昺井君」は琴山の次子、昺、通称玄斎。ヒ医を勤めていた。次の詩には、格別の友情が謳われている。

酬訓導井君見寄（訓導井君 寄せらるるに酬ゆ）
 孤雲流水客 孤雲 流水の客
 來去自無心 來去 自ら無心
 掬露嘗新草 露を掬して 新草を嘗め
 吹塵枕古琴 塵を吹きて 古琴に枕す
 誰言稀友侶 誰か言う 友侶稀なりと

到處是知音 到る処是れ知音
 況復山園夕 況んや復た山園の夕
 泉声添靜吟 泉声靜吟を添えんとは

「訓導井君」は、琴山の弟、村井習靜（一七五〇～一八二〇）。安永五年以来、藩校時習館で教えた。「誰か言う、友侶稀なりと。到る処、是れ知音」とは、「君子は敬して失無く、人と恭しくして礼有らば、四海の内は皆な兄弟たり」（『論語』顔淵篇）というのに近い。
 また「琴山先生叢桂園所名十二景のうちの第六」には、こういう詩もある。

玄響堂彈琴（玄響堂にて琴を弾く）
 別有彈琴室 別に彈琴の室有り
 名高玄響堂 名は高し玄響堂
 溪流聲自合 溪流の聲自ら合し
 山氣景如張 山氣景張るが如し
 松籟添鐘鼓 松籟鐘鼓を添え
 竹吟下鳳凰 竹吟鳳凰下る
 不求知己至 知己の至るを求めず
 萬物此中藏 万物此の中に蔵す
 ひゞけく世の涼しみを此一間

（同上、一二）

印象的なのは、「知己の至るを求めず。万物此の中に蔵す」という末句である。もはや外に「知己」を求める必要がなかったのであろう。時期は前後するかもしれないが、「叢桂園」ではさらに次のようなことがあった。

余寓叢桂園 木村君携來雷様琴云、是吾家蔵之長物也。而未嘗有試其音者。汝試乎否。余喜輒奏南薰操。其音甚清亮。因賦。
 （余叢桂園に寓す。木村君雷様琴を携え來たりて云う、「是れ吾が家に蔵するの長物なり。而るに未だ嘗て其の音を試みる者有らず。汝試みるや否や」と。余喜んで輒ち南薰操を奏す。其の音甚だ清亮なり。因りて賦す。）
 西園避暑坐松陰 西園暑を避け松陰に坐す
 高士携來雷様琴 高士携え來たる雷様琴
 彈奏再三不曾倦 彈奏再三曾て倦まず
 開元遺響入清吟 開元の遺響清吟に入る
 いと涼し先づ試の響にも

さて、楽しかった熊本滞在を切り上げる作は次のとおり。

奉留別琴山紫溟二先生 長相思二首（琴山・紫溟二先生に留別し奉る 長相思二首）
 江水流積水流 江水流れ積水流る
 歸路悠悠紫溟頭 歸路悠悠紫溟の頭
 琴樽月下遊 琴樽月下の遊
 惜三秋數三秋 三秋を惜しみ三秋を数う
 曲裡長吟雙淚浮 曲裡長吟双淚浮かぶ
 清風吹散愁 清風吹きて愁を散ず
 霜滿舟月滿舟 霜舟に満ち月舟に満つ
 別宴山山紅樹秋 別宴山山紅樹の秋
 交歡茲地留 交歡茲の地に留まり
 鼓琴遊賦詩遊 琴を鼓して遊び詩を賦して遊ぶ
 離曲今宵心更愁 離曲今宵心更に愁う

河漢星幾流

河漢に星幾くか流る

(同上、三)

この填詞の出来映えについて、神田喜一郎博士は「相当な佳什としてよい」と評している(『日本における中国文学』I—日本填詞史話上—、『神田喜一郎全集』第六巻、同朋舎出版、一九八五年)。

7

大城壺梁については、「壺梁先生略誌」に「貨殖を業とし、頗る致富」とあるように、儒者としては変わり種だった(『肥後先哲遺蹟』巻二)。亀井南冥とは気が合つたらしく、熊本に來ると壺梁宅に泊まるのを常としたという。南冥は壺梁のことを「元來町人にて、富有なる酒屋なりしを、学問もすぐれ詩文も達者なりしゆゑ儒者に召出されたたるものなり」と記している(『肥後物語』)。壺梁は時習館発足のころから「講釈への出席」を許され、宝曆十二年、句読師に取り立てられてより累進して、享和二年に助教となり、「職に居ること五十年」、禄高は二百石に及んだ。その人の詩集に、陰山豊洲(一七五〇〜一八〇九)が登場するのは、江戸滞在時に詠まれたからである。

松桂園歌、留別主人陰山子(松桂園の歌、主人陰山子に留別す)

結菴雖是傍都門

庵を結んで 是れ都門に傍うと雖も

多種松桂鬱成藩

多種の松桂鬱として藩を成す

松桂能教四隣遠

松桂能く四隣をして遠からしめ

終歳不聞世上喧

終歳世上の喧を聞かず

謾々松風吹晴戸

謾々として松風晴戸を吹き

娟々桂月媚暮軒

娟々として桂月暮軒に媚ぶ

多君咿唔在此裡

君を多とす 咿唔此の裡に在るを

尚友常与古人論

尚友常に古人と論す

我亦従前同臭味

我も亦た従前より 同臭味

倚閑時來共晤言

閑に倚り時に來たりて 晤言を共にす

酒三盃兮琴一曲

酒三盃琴一曲

優遊別自有乾坤

優遊別に自ら乾坤有り

無那歸期忽已逼

那んともする無し 歸期忽ち已に逼るを

將向西土問故園

將に西土に向かつて 故園を問わんとす

西土萬里雖逖矣

西土万里 逖しと雖も

相思寧無勞夢魂

相い思えば 寧ぞ夢魂を勞すること無からんや

(『壺梁先生遺稿』巻一)

「松桂園」主人、陰山豊洲は河内狭山藩儒の琴人だった(拙稿「山梨稲川—学匠詩人の琴—」、『太平余興』第十二集、二〇二三年、参照)。「謾々」は松風の音の形容。「娟々」は美しいさま。「多とす」は、賞賛すること。「咿唔」は読書の声。「尚友」は古人を友とすること。「臭味」は同じ傾向。見逃せないのは、「酒三盃琴一曲」である。「琴・酒」はここで重要な働きをしている。「優遊」は、ゆったりとしているさま。「乾坤」は天地。「西土万里逖し」には、「逖し西土の人」(『書経』牧誓)が踏まえられていよう。「夢魂を勞す」とは、夢で会いましょうの意。

一方、対応する豊洲の詩にはこう詠まれている。

晩春草堂集、送大城壺梁還東肥(晩春草堂集、大城壺梁の東肥に還るを送る)

官游江左地

官游江左の地

帰望海西天

帰望海西の天

枉駕過詩社

枉駕詩社を過ぎり

命觴開祖筵

觴を命じ 祖筵を開く

同人裁別賦

同人別賦を裁し

啼鳥和離絃

啼鳥離絃に和す

花惜三春暮

花は惜しむ三春の暮

月愁孤夜円

月は愁う孤夜の円

音容長夢寐

音容夢寐に長く

道路幾山川

道路幾山川

鶴舫鵬雲際

鶴舫鵬雲の際

熊城貝闕辺

熊城貝闕の辺

類宮還督学

類宮還た督学

大国最推賢

大国最も賢を推す

文物崇姬典

文物 姬典を崇め

菁華發郢篇

菁華 郢篇を発く

席珎知價重

席珎 価重を知り

置醴見恩專

置醴 恩専らなるを見る

當擬阿蘇峻

當に阿蘇の峻に擬すべく

儒名異域傳

儒名異域に伝う

〔松桂園詩集〕 卷四、文化三年刊

「江左」はもととも揚子江南岸を指すのに倣って、隅田川の南岸をいう。「祖筵」は送別の宴。「同人別賦を裁し」とは、先の壺梁の「留別」の詩を指し、主人の豊洲は琴を弾いて、「啼鳥離絃に和」したわけである。この場面は江戸の風雅の極めつけと言ってよいだろう。それを壺梁は親しく体験したわけである。「鶴舫」は、鷺に似た水鳥（鶴）はよく風に耐えるので船首に飾った、その船。「鵬雲」は、大鵬の翼のような雲。「貝闕」は竜宮。「類宮」はもと周の諸侯の学をいうが、ここは藩校のこと。「姬典」は『周礼』や『周易』などの書物。周は姫姓。「菁華」は精華と同義で、すぐれて美しいもの。「郢篇」は俗篇。「席珎」は席上の珍で、儒者の学徳のたとえ。「置醴」は酒宴。

ところで村井琴山の別荘、叢桂園での集まりを描いた『叢桂園雅集

図』の「記」に筆を執ったのも壺梁だった。長文なので、かいつまんで引用せざるを得ないが、書き出しは以下のとおり。

琴山村翁、山水の癖有り。小山の陽、浣紗溪の側、五六畝の地を買ひ、以て遊憩の堂を築き、扁して叢桂と曰う。堂の西廂、朱の闌干を設け、中に石几を置く。蓋し琴案なり。

〔遺稿〕 卷六

「琴案」は琴を置く台。ここで琴山は「佳節毎に、折簡以て吾が党を会す。吾が党も亦た必ず赴き、娛しみを極めて後帰る」という集まりを主催していた。「折簡」は短い招待状。ここには江戸の風雅に勝るとも劣らない楽しみがあったろう。とまれ、今年七月七日の会には、「翁、令嗣村子陽に命じて『雅集図』を作る」ことになった。「子陽」は村井蕉雪（一七六九〜一八四二）、冠吾と称した、琴山の長子。その「墓誌」には、「君、天資磊落、風韻高邁、人表に出で、講業之余、詩画を好み、其の酒後、毫を揮うや、劇談高笑、傍らに人無きが若し」と伝えられている。「再春館医学監」を勤め、田能村竹田（一七七七〜一八三五）とも親交があつて、『竹田莊師友画録』卷上、「居常、琴書を遊び、梅琴亭に入り、古書画を撫し、茶を煮、花を挿し、明窓浄机、興来たれば揮灑、書画以て娛しむと為す」（『肥後藩画人名録』、『続肥後先哲偉蹟』 卷八）という文人でもあつた。

先の『雅集図』には、

其の烏帽鶴髦、磁鼓に踞り、石几に俯し、以て七絃琴を弾じて、風範卓然たる者、主人の村翁なり。（中略）其の蒲団に坐して、詩を評騰し、道貌藹然たる者は、紫溟李先生なり。

というように描かれていた。このとき、琴山や紫溟はかりでなく、筆

者の壺梁もまた「齢已に七十左右に在り。則ち感慨無きこと能わず」だったので、その記念でもあったようだが惜しいことに絵は失われたらしく、この詩から想像するしかない。

さらにまた米田松洞にも「叢桂園集并序」があり、そこにはこう記されている。

主人曰く、「或いは云う、大隠は朝市に隠るとは、是れ山林隠趣を知らざる者の言なり。或いは云う、跡を山林に避くるは、是れ人間の楽しみを知らざる者の言なりと。我は奚ぞ然らん。風塵中に栖栖として、時時茲に来往して、山林を楽しむ者なり。何ぞ必ずしも大隠を之れ為さんや。故に自ら号して琴山小隠と曰う」と。余は喟然として嘆じて曰く、「山野溪谷中に在りて、行楽は人と俱にす。隠、豈に小と為さんや。坐上、其の事を賦して、贈と為す」と爾云う。

〔四時園詩集〕二篇卷三

これは松洞が「主人」琴山の意見を代弁したとも見られよう。さらにまた壺梁の詩に詠まれた琴は、興味深いものが少なくない。たとえば、五言古詩の「題井大年所藏古琴」（井大年の所藏 古琴に題す）には、こうある。

嶧陽千載幹
爰伐作雅琴
粲々素糸絃
鑑々太古音
夕隨流水澗
乃就叢篁陰
璧月稍將上

嶧陽 千載の幹
爰に伐りて 雅琴と作す
粲々 素糸の絃
鑑々 太古の音
夕べに隨う 流水の澗
乃ち就く 叢篁の陰
璧月 稍や將に上らんとして

爽氣滿衣衿 爽氣衣衿に満つ

臨風時一彈 風に臨んで時に一彈すれば

響淡趣何深 響は淡く趣何ぞ深き

却愛知者少 却つて愛す知者の少なるを

高奇得冥心 高奇冥心を得たり

〔壺梁先生遺稿〕卷一

「嶧陽」は江蘇省にある山名、琴の良材となる梧桐の産地。「粲々」は彩りが美しいさま。「素糸」は白糸。「鑑々」は澄んだ音の形容。「流水」は琴の名手伯牙にちなむ言葉。「叢篁」は竹藪。「璧月」は円月。「衣衿」は衣服の襟。「臨風」は風に向かつて。満月がのぼろうとして爽快の気が満ちると、風に向かつてさっと琴を弾けば、その響きは「淡く」ても「趣」は一段と深い。その微妙なさじ加減を理解するのは至難である。これは誰でも共有できるものではなく、「知者の少なる」は返つて喜ばしいことになる。「高奇」は高尚で特異。「冥心」は深い思索。壺梁と琴山のつながりにもまた、かくも深いものがあつたのである。

〔村君山莊分韻〕にも、こうある。

茂松修竹自清幽 茂松修竹自ら清幽
家在西溪々水頭 家は西溪に在り溪水の頭
琴酒風流多樂事 琴酒風流 樂事多し
乾坤何別有滄洲 乾坤 何ぞ別に滄洲有らんや

〔同上、卷四〕

「茂松・修竹」は松林と竹林。「乾坤」は天地。「滄洲」は隠者や仙人の住むところ。松や竹で囲まれた琴山の山莊は「西溪」にあつて、ここでは「琴・酒」の風流が日常茶飯事の別天地だった。また「朝爽樓集聽琴」（朝爽樓集、琴を聴く）には、こう詠まれて

いる。「朝爽楼」は未詳。

孤桐幾歳托巖阿
製得偏憐紋作蛇
忽聽幽蘭操妙曲
還翻白雪入清歌
涼如石罅流泉咽
颯似林間驟雨過
世上如教鍾子在
重將改調奏洋峨

孤桐幾歳か巖阿に托し
製し得て偏えに憐む紋蛇と作るを
忽ち聴く幽蘭妙曲を操るを
還つて白雪を翻して清歌に入る
涼いで石は罅け流泉は咽ぶが如く
颯として林間に驟雨の過ぎるが似し
世上如し鍾子をして在らしめば
重ねて改調をもつて洋峨を奏せん

（同上、卷三）

「孤桐」は一本立ちの桐で、「巖阿」山あいの谷間にひっそりと生えていたのを琴に仕立てて、「紋」が「蛇腹断」になつたもの。ふつうは数百年を経た古琴でなければ生じないとされる。「幽蘭」「白雪」は琴曲の名。「涼如」以下は、琴の見事な演奏の様子。「世上」この世に「鍾子期」伯牙の琴の理解者を再現させたなら、「改調」調子を変えて「洋峨」峨々・洋々たる演奏をするものという気持ち。壺梁はここでそういう演奏を聴いたのであろう。

その結果、「琴譜跋」にはこうある。

金石糸竹、匏土革木、孰れか先王の遺音に非ざる。然れども能く人をして感興をなさしむる者は、糸声に如くは莫し。（中略）人、一たび之を聴けば、則ち胸結頓かに解く。是れ其の最と為す所以なり。吾が畏友琴山翁、性弾琴を好み、晩年尤も深し。心平和にして、行い方直なるは、蓋し琴に得る有るなり。古に曰く、「琴は禁なり。能く人の邪心を禁ず」と。豈に然らざらんや。

（同上、卷七）

「匏・土」は、ひさごをくりぬいて作つた笙の一種と、土を焼いて作つた楽器。「革・木」は皮を張つて作つた鼓と、木で作つた楽器。「糸声」は琴の音。「一たび之を聴けば、則ち胸結頓かに解く」というのが、「琴」の最大の魅力である。「胸結」は気の塞ぎ。「方直」は方正。琴山の平生を知る人の言として、信ずるに足るだろう。

8

辛島塩井（一七五四〜一八三九）は古賀侗庵（一七八八〜一八四七）選する「塩井辛島先生墓誌銘」に、「先生幼にして聰悟、稍や長じて学に入り、精苦無比、天明丙午、訓導に擢んでらる。時に青溪君、尚お軽佻にして、父子同僚たり」（『肥後先哲遺蹟』卷三）と記されているように、代々儒をもつて熊本藩に仕え、父青溪と藩校の同僚になつた。「軽佻」は敏捷と同義。享和壬戌（一八〇二）には、幕命により昌平覺で教えた。また「乙酉、疾を以て事を致し、是より世紛を謝し、山水に徜徉して以て自適す」（同上）というように、「乙酉」文政八年（一八二五）の致仕以来、自然のなかで「自適」した晩年の過ごし方が素晴らしい。

すでに見たように、「南家夜集」で玉堂の琴を聴いたさいの詩も見事だったが、ほかにも琴にまつわる詩が散見する。目に付くままに、まずは次の作から。

冬夜、曾生抱琴一張見過。云將歸郷。因賦此送別（冬夜、曾生琴一張を抱いて過ぎらる。云う、將に帰郷せんとすと。因りて此を賦して、送別す）

匹馬歸蒼野 匹馬蒼野を帰る

悠悠天一涯 悠悠天の一涯

人將豹俱隱 人は豹と俱に隠れ

琴與鶴相隨 琴は鶴と相い随う

夜雪操離曲 夜雪 離曲を操り

寒燈勸別巵 寒灯 別巵を勧む

知音何用問 知音 何ぞ問うを用いん

山水即鍾期 山水 即ち鍾期なり

〔塩井先生遺稿〕卷二

「曾生」は、曾木墨莊。『竹田莊師友画録』卷下に、「袁亮」として載

る「豊前青村の人」で、「青村」を訳せば「蒼野」となる。竹田は

続けて、

予、熊府に於いて始めて相い識る。時に詩を李教授に学び、医、

及び弹琴の訣を琴山翁に受く。

と記している。「李教授」高本紫溟のもとで、墨莊と竹田は同窓だっ

た。その誼で、後に墨莊宅を訪れ

て「三句」のあいだ滞在し、名作

《梅花書屋図》(図1、出光美術館

蔵)を描いたのが天保三年(一八

三三)のこと、書斎では「詩を賦

し、書、若しくは画を作る。倦め

ば則ち琴を理ない『南薰』を操るこ

と兩三遍(同上)と竹田は書き

添えている。したがって画面から

琴の調べが聞こえてきても、なん

ら不思議ではない。

ところで、熊本の琴の場面での

琴山の不在は、それだけでニュー

スになったらしい。

初春草堂小集、琴山翁不至(初春、草堂小集、琴山翁至らず)

新歳弥旬天易陰 新歳 旬を弥たつて天陰り易し

諸賢何幸此幽尋 諸賢 何の幸いか此に幽尋す

勝花剪彩寒漸尽 勝花 剪彩 寒漸く尽く

垂柳含糸烟稍深 垂柳 糸を含んで烟稍や深し

傾酒摘蔬宜夜話 酒を傾け蔬を摘めば夜話に宜し

挑灯聴雨亦春心 灯を挑かげて雨を聴くも亦た春心

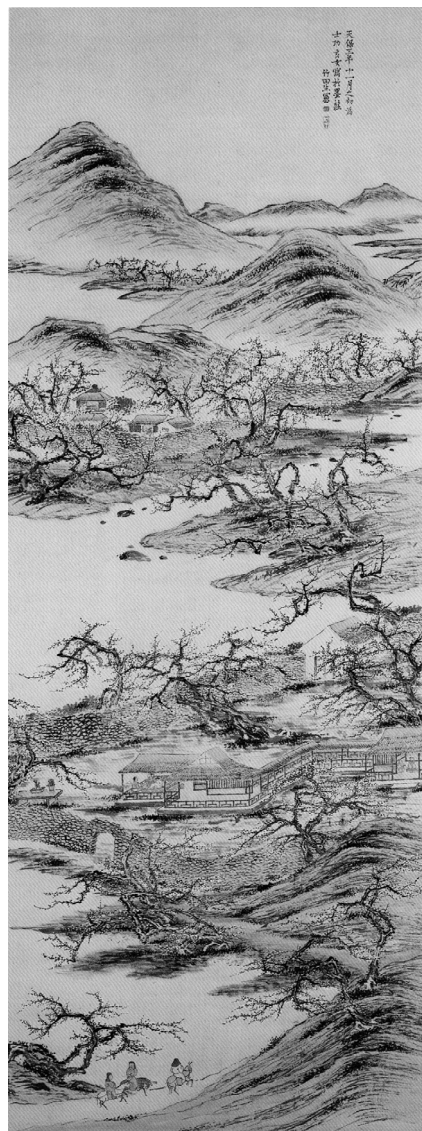
一堂独少弹琴侶 一堂 独り少く弹琴の侶

誰弄郢中白雪音 誰か弄かせん郢中白雪の音

〔塩井先生遺稿〕卷二

このとき塩井の草堂に集まった「諸賢」のなかに、琴山の姿はなかつ

た。「幽尋」は奥深いところに訪ねること。「雨を聴くも亦た春心」で



(図1)

はあるが、「弾琴」の趣に叶うはずもない。琴山の欠落はそれほどまでに大きかったのである。

「琴版題句記」には、「東海遵波千萬里、西山對雪兩三彈」（東海、波に遵う千萬里、西山、雪に對す兩三彈）という割注が付いている。本文は次のとおり。

是琴材自經爰伐以來、蓋百年間之物、攀桂道人所旧藏。余懇求切請、蓄之亦有年矣。余自去年祇役江都也、常恨不携之齋裝中、以製一張琴。先是附家書言及其事。後家人裝發、海舶送致、不出數月、達于江都。乃命琴匠田操者造焉。不日而成。輪片木之斷、凌絶海之波、彈七絃之妙、對芙蓉之雪、亦客居中之一樂事也。是一聯彈弄之餘、偶然而成者、因題之于版上、掛版亦余材所成云。享和癸亥夏五月某日、識于韓田邸舍。

（是の琴材は、爰に伐らるることを經しより以來、蓋し百年間の物、攀桂道人の旧藏する所なり。余、懇ろに求め、切に請いて、之を蓄うること、亦た年有り。余、去年より江都に祇役するや、常に之を齋裝中に携えざるを恨む。以て一張の琴を製せんとす。是より先、家書に附して其事に言及す。後に家人裝發して、海舶送致、数月を出でずして江都に達す。乃ち琴匠田操なる者に命じて焉を造らしむ。日ならずして成る。片木の断を輪し、絶海の波を凌ぐ。七絃を弾ずるの妙、芙蓉の雪に對するも、亦た客居中の一樂事なり。是の一聯は、彈弄の余、偶然にして成る者なり。因りて之を版上に題し、版に掛くるも、亦た余材の成る所と云う。享和癸亥夏五月某日、韓田の邸舎に識す）

これを見ると、塩井はかねてより琴を作るために材料を準備していたことが知られる。そして江戸滞在のうちに、わざわざ国元から「琴材」

を取り寄せて、「田操」なる「琴匠」に製作を依頼して実現した。こうして出来上がった琴を演奏するのが「客居中の一樂事」だったというのである。

大城壺梁の次の詩は、熊本に帰ってからの光景を伝えている。

辛伯彝恭承臺命、説經昌平學。期年卒業、賜金若干。既而我公命誘導郎中子弟。歸期在明年。今茲十一月、公殊命賜暇。蓋以母老請之。（辛伯彝恭しく台命を承けて、經を昌平學に説く。期年業を卒え、金若干を賜る。既にして我が公郎中子弟を誘導せんことを命ず。歸期 明年に在り。今茲十一月、公殊に賜暇を命ず。蓋し母の老を以て之を請うならん）

征驂歸到古城陰 征驂 歸り 到る 古城の陰

開宴何ぞ俗事侵 開宴 何ぞ 俗事をして 侵さしめんや

郢里裁歌翻白雪 郢里 歌を裁し 白雪を翻す

燕臺招駿致黃金 燕臺 駿を招き 黃金を致す

尊盈芳醕供賓坐 尊は 芳醕を盈し 賓坐に供う

盆植奇花慰母心 盆に 奇花を植え 母心を慰む

多爾清風堪刮目 多とす 爾清風 刮目に堪えたり

壁間新掛七絃琴 壁間 新たに掛く 七絃琴

〔壺梁先生遺稿〕卷三

「征驂」は遠くへ行く車馬。「燕臺」は燕の昭王が台を築いて賢者を招いた故事によつて、塩井が昌平學に招聘されたことをいう。「駿」は俊才。優れた人。「芳醕」は美酒。「奇花」は珍しい花。「清風」は高潔な風格。「壁間に新たに掛」かる「七絃琴」は、その象徴である。

また、こういうこともあった。

秋盡前一夕、蘭思琴所集、竹田文学至自豊、因賦贈一律、兼寓

懐舊之意云（秋尽くる前の一夕、蘭思琴所集、竹田文学豊より至る。因りて一律を賦して贈る。兼ねて懐旧の意を寓すと云う）

二十年前會一堂 二十年前一堂に會し

清歛幾度接詞場 清歛幾度か詞場に接す

再遊城郭仍如故 城郭に再遊すれば仍お故の如きも

旧識人琴多共亡 旧識の人琴多くは共に亡し

蘭草已凋秋色晚 蘭草已に凋んで秋色晩る

菊花纔耐夜來霜 菊花纔かに夜來の霜に耐う

應須邂逅永斯夕 応に須く邂逅して斯の夕を永くすべし

興在陶家濁酒觴 興は陶家の濁酒の觴に在り

（『塩井先生遺稿』卷四）

「蘭思琴所」は、詩仙堂の陳眉公の琴を邨淵充房が模造したものを琴山が常に弾いていたのを置いていた場所（『琴山琴録』卷上）。「豊」からきた「竹田文学」とは、田能村竹田のことである。「二十年前」のことならば、「旧識の人琴多くは共に亡し」ということもあり得る話である。この詩の少し前に、「竹田詞宗来訪、喜賦一絶」（竹田詞宗来訪す。喜びて一絶を賦す）があり、「崎陽村尾某至。卒賦一絶」（崎陽の村尾某至る。卒かに一絶を賦す）が続いているので、これは文政十年（一八二七）十月十日頃、一旦熊本に着いてから薩摩に向かい、十一月二十九日に船で熊本まで帰ってきて、年末まで滞在したときのことである。したがって「二十年前一堂に會し」たのは、文化六年（一八〇九）三月二十日から四月中旬までの熊本行のさい、時に竹田は三十三歳だった。末句の「濁酒」は、淵明の「飲酒」其十九に出る、「濁酒聊可恃」（濁酒聊か恃む可し）に拠る。

「感興詩」には、「友人伊大素、六月五日を以て死す」の割注が付いている。「伊大素」は伊形大素（一七四五〜八七）、『楽泮集』卷六には「師員」とある。

月明何皎皎 月明何ぞ皎皎たる

天宇杳茫茫 天宇杳として茫茫

中夜起徘徊 中夜起きて徘徊し

良遊匪可忘 良遊忘る可きに匪ず

清風激當世 清風当世に激し

幽蘭抽夙芳 幽蘭夙芳を抽く

高志天雲際 高志天雲の際

氣貫九秋霜 氣は貫く九秋の霜

惜哉命不永 惜しいかな命永からず

人琴忽與亡 人琴忽ち与に亡ぶ

遺草白雲篇 遺草白雲の篇

孤寡泣餘篋 孤寡余篋に泣く

嘗聞宛其死 嘗て聞く宛も其れ死せんとし

侘人入爾堂 侘人爾が堂に入ると

言猶在吾耳 言猶お吾が耳に在り

念之淚沾裳 之を念えば涙裳を沾す

輕塵棲弱草 輕塵弱草に棲み

人生誠渠央 人生は誠に渠かに央く

（『塩井先生遺稿』卷二）

「天宇」は天空、大空。「清風」は大素の清らかな風格。「幽蘭」は琴曲の名。「夙芳」はその芳しき。「高志」は気高い志。「九秋」は秋の三ヶ月。「人琴忽ち与に亡ぶ」とは、大素も琴人だったことを伝えている。「孤寡」は、のこされた遺族、みなしごとやもめ。「余篋」は、書物などを入れる遺された小さな箱。「輕塵」は細かい塵。「弱草」は、弱々しい若草。ともに弱さやはかなさを示す。

塩井の「伊大素を祭る文」には、「嗟あ子の才の美、絶世無比、妙思を高雲に属し、麗藻を芳芷に発す」と絶賛している。そして、「今、

子長逝して、洋洋の音、猶お吾が耳に盈つ」といい、「城府の蝸居を隘しとして、其の山林を慕うや、俗士の籛籛を薄んじ、殆ど宅を巖野に卜し、爰に琴書を樂しむ。」（同上、卷八）という。「麗藻」は美しく勝れた詩文。「芳芷」は香草。「蝸居」は自分の家の謙称。「籛籛」はおべつか使い。友人の没後に「洋洋の音」が耳に響き、「巖野」に構えた居宅で「琴書を樂し」んでいたという大素のライフスタイルまでが浮かび上がる描写である。

しかし、そういう人物が藩校に拔擢されて数年後に、「心よからざるところあつて致仕し、郷に帰つて諸生に教え、高本紫溟・辛島塩井が書を届けて招いたが、ついに出て来なかつた。封建社会の常としてその出身が農家であつたに因るとみられる」と笠井助治『近世藩校に於ける学統学派の研究』下巻、吉川弘文館、一九七〇年）は説明している。ここにも身分社会の弊害が認められよう。

その大素に、「過大雅先生竹裡亭」（大雅先生の竹裡亭を過ぎる）と題する作があるのは、有職故実を学ぶために京都遊学中に、池大雅（二七二〜七七六）を訪ねたさいのことである。大素と同年配の菅茶山（一七四八〜一八二七）が京都遊学中に大雅から三幅も描いてもらつたという話が思ひ合わされる（「大雅が画軸の匣に題す」、『黄葉夕陽村舎文』卷四）。

一亭幽竹裡	一亭 幽竹の裡
可以結詩盟	以て詩盟を結ぶ可し
彩筆雲烟色	彩筆 雲烟の色
瑤琴山水情	瑤琴 山水の情
暮林藏鳥語	暮林 鳥語を藏し
春雨聽蛙鳴	春雨 蛙鳴を聴く
欲歩青苔去	青苔を歩み去らんと欲すれば

如何履跡生 履跡の生ずるを如何せん。

（『靈雨山人詩集』卷三、『肥後文献叢書』第五卷）

「幽竹」は深く茂つた竹藪。「瑤琴 山水の情」は大雅の妻、玉瀾が奏したのであろう。『近世畸人伝』には、「夫は三絃の与みといふものを、さびたるこゑして弾うたへば、妻はまた古びたるうたをつくし箏にかけて弾、其箏の与みもまたよくせりとなん」（卷四、図2）とある。「青苔」は青い苔。「履跡」は足跡。

もう一首「別葛陂先生（葛陂先生に別る）には、こう詠まれている。葛陂は高葛陂（二七二四〜七七六）。茶山が蕪村を見かけたのも、葛陂の塾においてだつた（前掲、『屠赤瑣瑣録』卷三）。



（図2）

故人琴酒惜離顏
海上蒼茫萬里山
試借葛陂仙子杖
欲凌雲霧問鄉關

故人の琴酒離顏を惜しむ
海上蒼茫たり萬里の山
試みに葛陂仙子の杖を借り
雲霧を凌いで郷關を問わんと欲す

(同上、卷四)

「故人」は旧友。「琴・酒」は文人の楽しみとしての琴と酒。ここでは送別を兼ねた。「離顏」は別れの表情。「葛陂」は、河南省の湖沼の名。水中に霊が住み、費長房が投げた杖が竜に変じたという昔話が伝わっている。

9

これまで主な人々の琴について見てきたが、最後に熊本の人々の厚さという視点に立って概観しておこう。それには藪孤山の撰述にかかるアンソロジー『楽洋集』が便利である。まず池辺匡卿の「寿永琴引」から。匡卿は府学訓導だった。「寿永」は平安末期の年号で、一一八二年改元。

匣裏何人蓄古琴
斷紋蛇腹重南金
髻髯猶餘壽永字
洋洋似聞大雅音
剥落當年龍鳳象
對此不禁懷古心
旋絃廻軫彈一曲
倏忽坐我湘水陰
中庭月白清風度
離鷓別鶴遶瑤岑

匣裏何人か古琴を蓄う
斷紋蛇腹南金を重んず
髻髯として猶お余す寿永の字
洋洋として大雅の音を聞くが似し
剥落当年の竜鳳の象
此に対して禁ぜず懐古の心
旋絃廻軫一曲を弾けば
倏忽我は坐す湘水の陰
中庭月白く清風度り
離鷓別鶴瑤岑を遶る

伯牙未死子期嘆	伯牙未だ死せざれば子期嘆く
高山流水為正襟	高山流水為に襟を正す
此器由来廟堂貴	此の器由来廟堂に貴はれ
胡為久得塵埃侵	胡為ぞ久しく塵埃に侵さるるを得たる
憶昔芬華平相國	憶昔芬華平相國
朝臣趨陪承顏色	朝臣趨陪顏色を承く
紛紛聲樂競新奇	紛紛たる声樂新奇を競い
酒池肉林無終極	酒池肉林終極無し
黃金為屋玉為梁	黃金屋と為し玉梁と為す
貂蟬盈坐頌其德	貂蟬坐に盈ち其の徳を頌む
一自相國歸九江	一たび相國の九江に帰りしより
子孫封土如裂幅	子孫の封土幅を裂くが如し
戰鼓雷驚震山川	戰鼓雷驚山川を震う
倉皇遁逃大海邊	倉皇として遁逃大海の辺
此器何人能奉持	此の器何人能く奉持す
不與戰骨歿重淵	与からず戰骨重淵に没するに
嘆息天下洵洵日	嘆息す天下洵洵の日
一器長傳七百年	一器長く伝う七百年

(『楽洋集』卷三)

「南金」は荊州や揚州から出る黄金。上質だったので貴いものを指す。「旋絃」は弦楽器を奏でること。「廻軫」は琴の絃のねじを巻いて調弦すること。「芬華」は草花が繁茂するさま。「平相國」は平清盛。「雷蟬」は雷のように轟くこと。「倉皇」は、あわてるさま。「遁逃」は逃げること。「洵洵」は、どよめき騒ぐ戦乱の様子。そうした珍しい琴が匡卿の身近なところにあつたのであろう。『平家物語』の時代の「寿永琴」の歴史もまた熊本の琴の調べに厚みを加えただろうか。

古屋愛日齋（一七三一〜九八）名は鼎、玉山門下の熊本藩儒に、「秋山夕興」と題する作がある。

日落秋山静 日落ちて秋山静かなり

澗戸白雲深 澗戸白雲深し

已有泉上酌 已に泉上の酌有り

復此松下琴 復た此に松下の琴

一杯弾一曲 一杯一曲を弾じ

蘿月澹幽襟 蘿月幽襟澹たり

寄言青瑣客 言を寄す青瑣の客

幾人是同心 幾人か是れ同心ならん

（同上）

「澗戸」は谷間の家。「泉」のほとりでは既に一杯聞こし召したうえで、「松の木の下」で松籟とともに「琴」を聴く。「蘿月」は、蔦葛のあいだから見える月影。「幽襟」は深い物思い。「青瑣の客」は宮門の人々。「同心」は心情を同じくする友。

村井士瑤（一七五〇〜一八二〇）は琴山の弟で、府学句読師をつとめた。

三日從李先生郊遊（三日李先生の郊遊に従う）

蘭亭移彦會 蘭亭彦会を移し

散步伴春風 散歩春風を伴う

衣染山山翠 衣は染む山山の翠

花飄樹樹紅 花飄樹樹は紅なり

携來琴與酒 携さえ來たる琴と酒と

詠去冠兼童 詠じ去る冠と童と

誰識三春興 誰か識らん三春の興

悠然一醉中 悠然一醉の中

（同上、卷六〇）

「李先生」は高本紫溟。「蘭亭」は王羲之が会稽山陰で曲水流觴の雅遊を催したさいの場所。「彦会」は、すぐれた人の集まり。そうした集まりに倣って、三月三日の「郊遊」に「琴と酒」を携えたのである。第六句は『論語』先進篇の、「点よ爾は如何」の問いに對する答え、「冠者五六人、童子六七人を得て、沂に浴し、舞雩に風して、詠じて帰らん」に拠る。師弟間の親しみが感じられる。

同じく「郊行」と題して、

東郊日出彩霞明 東郊日出でて彩霞明らかなり

十里春山畫裏行 十里の春山画裏に行く

携得孤琴兼一杖 携さえ得たり孤琴と一杖と

飛花啼鳥似相迎 飛花啼鳥相い迎うるに似たり

（同上）

「彩霞」は見事な朝焼けの雲気。「画裏」は、絵のように美しい景色の中。そのなかを「孤琴と一杖」を携えて、晴れ晴れと歩く楽しみは格別である。「飛花」は落花。「啼鳥」は鳥の鳴き声。「郊行」野遊びを花や鳥までが歓迎してくれているという満足感、社会の安定を前提としている。

また飯田士良という祐筆には、次のような詩がある。

予近學琴、夢寐之間、意恒在高山流水焉、慨然有感（予、近ごろ琴を学ぶ。夢寐の間も、意は恒に高山流水に在り。慨然として感有り）

予近學琴、夢寐之間、意恒在高山流水焉、慨然有感（予、近ごろ琴を学ぶ。夢寐の間も、意は恒に高山流水に在り。慨然として感有り）

不見琴中山 琴中の山を見ず

唯聽琴中水 唯だ琴中の水を聴くのみ

欲彈未敢彈 彈かんと欲して未だ敢えて弾かざれば
松風灑五指 松風五指を灑ぐ

(同上、巻七)

「夢寐の間」は寝ている間。「慨然」は氣力を奮い起こすさま。「山を見ず、水を聴く」のは高山流水であろうが、どうして「山」が除外されるのか不詳。

諸史松邨子述の「偶成」には、こう詠まれている。

熊城南畔白河澗	熊城南畔白河の澗
茅屋蕭條秋色深	茅屋蕭條として秋色深し
孤月閑雲來石枕	孤月閑雲石枕に來たり
高山流水入瑤琴	高山流水瑤琴に入る
掩門無復風塵客	門を掩えば復た風塵の客無し
開帙悠然天地心	帙を開けば悠然たり天地の心
只有求羊遺世侶	只だ求・羊の世侶を遺れて
時時蒿徑曳藜尋	時時蒿徑に藜を曳いて尋る有り

(同上)

「白河」は熊本市内を流れる白川。「茅屋」は質素な家。いかにも寂しげで、「秋色」はひときわ深い。「孤月」は、ひっそりと空に浮かぶ一輪の月。「閑雲」は静かに流れる雲。「石枕」は石を枕とする、俗塵を避けて隠遁するたとえ。「高山流水瑤琴に入る」は、琴の調べがそのまま詠われている。「風塵の客」は俗世間の人々。門を閉じれば、こうした連中に妨げられる心配はない。書物を開けば、ゆったりと世界の「心」に触れることができる。「求・羊」は漢の高士、求仲と羊仲。前漢末、王莽政権下の蔣詡は病を口実に辞職、隠居して庭の三本の道に松・菊・竹を植え、そこに「求・羊」二人が遊びに來た故事に拠る(『漢書』巻七十三)。「世侶」は世間の仲間。「蒿徑」は荒れた道。「藜」

は、あかぎの茎で作った質素な杖。この作者は世間に距離を置いていたようだが、おそらく志を同じくする少数の友人には恵まれていたであろう。「諸史」大勢の役人のなかに、このような詩を詠むひとがいたことが、熊本藩の人材の豊富を雄弁に物語る。帆足彦齡は、村井琴山の弟の帆足子幹の子であるが、次のような詩があるのを見れば、この人も琴人だった。

醉後寄山中友人(醉後 山中の友人に寄す)	杜戸無人事 戸を杜ずれば人事無く
幽琴又濁醪	幽琴 又た濁醪
看雲時枕石	雲を見て時に石に枕し
披髮或持螯	披髮 或いは持螯
但使孤樽滿	但だ孤樽をして満たしめよ
何求五斗勞	何ぞ五斗の勞を求めんや
交遊疎禮俗	交遊 礼俗を疎んじ
酣暢愛風騷	酣暢 風騷を愛す
元亮官長謝	元亮 官長を謝し
梁鴻世已逃	梁鴻 世より已に逃る
朝朝見麋鹿	朝朝 麋鹿を見
處處沒蓬蒿	處處 蓬蒿に没す
容膝安衡宇	容膝 衡宇に安んじ
灌園笑桔槔	灌園 桔槔を笑う
跡齊藏豹遠	跡は齊し豹を蔵することの遠き
身慕臥龍高	身は慕う臥龍の高きを
親友多分散	親友 分散多し
思君坐鬱陶	君を思い鬱陶に坐す
近來同調少	近來 同調少なし

山水向誰操 山水誰に向かいてか操せん

（同上）

「人事」は人付き合ひ。戸さえ閉めれば、そうした煩わしさもなく、「幽琴、又た濁醪」を楽しむことができる。「披髮」は頭髪を振り乱すこと。「持螯」は蟹の前足を持つ、すなわち美食を尽くすこと。「五斗の勞」五斗米は県令の俸禄。陶淵明が「我れ豈に能く五斗米の為に腰を折りて郷里の小児に向かわんや」（蕭統「陶淵明伝」といつて帰郷したことはよく知られている。「酣暢」は酒を飲んでのんびりすること。「元亮」は陶淵明の字。「梁鴻」は『蒙求』巻下に「梁鴻五噫」が収まるのに依れば、

霸陵山中に隠れ、耕織を以て業と為す。詩書を詠じ、琴を弾じ、以て自ら娛しむ。

と見えるように、いずれも「琴」に関係する。「麋鹿」は大鹿と鹿。「蓬蒿」は、よもぎの草むら。「容膝」は、膝を入れられるだけの小部屋。「衡宇」は粗末な家。「灌園」は水撒きのような畑仕事。「桔槔」は、はねつるべ。「葺豹」は隠遁のたとえ。「臥竜」は、まだ機会を得ない英雄のたとえ。「分散」は分かれ分かれになる。「鬱陶」は気持ち晴れないこと。「同調」は考えに賛成すること。「山水」は高山流水の略。こうして挙げていけば切りもないが、長岡宮之の臣、仲井士成に次の作がある。

冬夜復陽洞集（冬夜復陽洞集）

嘯侶相逢處

嘯侶相い逢う処

梅花欲發時

梅花発かんと欲する時

撫琴流水響

琴を撫せば流水の響

繞洞白雲垂 洞を繞つて白雲垂る

閑對松間月 閑かに松間の月に対し

同題石上詩 同に石上の詩を題す

漏聲猶未盡 漏声猶お未だ尽きず

欲去更含卮 去らんと欲して更に卮を含む

（同上、巻八）

「復陽洞」は復陽洞真人と号した村井見朴、字醇民の号で、村井琴山の父に当たる。秋山玉山は「邨井君見朴碑銘」に、

君、医を業とす。然れども世の方伎家の専ら糶を重んずるを惡み、奮然として独り仁術を以て自任す。病家に趨き、尊卑一視、低昂を為さず。

と記している。「糶」は食糧。経営重視の医者が大方であったときに、見朴は医は仁術と心得て、患者の「尊卑」には左右されなかった。さらに宝永六年、医学館再春館の創設にともない、見朴は教授となったものの、

君、失明してより後、益ます音に精しく、好んで鉄笛を吹き、琵琶を弾ず。別に一室を構え、顔して「天際窟」と曰う。広狭裁かに檀槽一面を容るのみ。静夜、独り其の中に坐し、撥を弄する。と一再行、四絃冷然として、天籟と相い応ず。竹月娟娟と人を窺う。其の風韻の高邁なること此の如し。

（『肥後先哲遺蹟』巻一）

と記されている。「失明」の結果、「音」にますます敏感になるのはよくある話である。部屋の扁額に字を書くのを「顔」という。その名も

「天際」とは、狭い一室を天の果てと見立てたわけである。「檀槽」は梅檀の木で造った琵琶。その演奏は「天籟」自然界の音と響き合っていた。ここでは『莊子』齊物論篇の「汝は地籟を聞くも、未だ天籟を聞かざるかな」という南郭子綦の言葉が思い合わされる（金谷治訳注『莊子』第一冊、岩波文庫）。折しも竹林から漏れる月光に照らされて、「風韻」その気品の高さは比類がなかった。「娟娟」は月影の美しいさま。

ここで仲井士成が会った「嘯侶」詩人仲間は「撫琴流水響」とあるので、あるいは琴山だったかもしれない。「漏声」は水時計の滴る音。さらに堤高、字公亮の「禪室聽琴」（禪室に琴を聴く）には、こう詠まれている。

溪上松雲一室深

溪上の松雲 一室深し

禪餘迎月調瑤琴

禪余 月を迎え 瑤琴を調ぶ

休言流水難相和

言うを休めよ 流水相和すること難しと

別有頻伽雜妙音

別に頻伽の妙音を雑うる有り

（同上、巻九）

「頻伽」はヒマラヤに住む妙音を発する鳥。この詩によって「禪室」で「瑤琴」を奏する僧がいたことが知られる。琴がこれほどまでに行き渡っていたところは珍しいのではなからうか。

注

(1) 「琴人龍草廬」（『太平余興』第十一集、太平書屋、二〇二二年）および「山梨稲川一学匠詩人の琴」（同上、第十二集、二〇二三年）、ならびに「楽に寄せて―漢詩に読む琴の調べ―」（『京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター 研究紀要』第二〇号、二〇二三年）を参照。

(2) 『浦上玉堂 白雲も我が閑適を羨まんか』（ミネルヴァ日本評伝選、二

〇二〇年）参照。

〔後記〕小論は二〇二二年のコロナ禍の折から、リモートによる京都市立芸術大学の日本伝統音楽研究センターの小研究会で発表した原稿に基づいている。すでにその一部は注（1）に触れたように『太平余興』第十一集以下に掲載し、序論にあたる「楽に寄せて―漢詩に読む琴の調べ―」がまもなく『センター研究紀要』に掲載予定なので、合わせ御参照いただければ幸いである。コロナ終熄後も小研究会はしばらく続きそうなので、江戸の琴人を尋ねての旅はまだ終わりが見えないうが、座長の武内恵美子氏はじめ、尺八の善養寺恵介氏・思想史の小島康敬氏に深甚の謝意を表す。

